

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：37103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520445

研究課題名(和文)中国西周時代昭王期の金文研究

研究課題名(英文)A Study of Jin Wen in Zhao Wang Days of the China Western Zhou Period

研究代表者

古木 誠彦(KOKI, MASAHIKO)

九州女子大学・人間科学部・准教授

研究者番号：90341297

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中国西周時代昭王期の文字に主眼を置き、その時代確定と字形の特徴をより明白にすることが目的である。具体的研究内容は、(1)現在確認されている中国西周青銅器の時代検討、(2)昭王期器物の確定、(3)銘文中の文字(字形)の検証、(4)異体字の確認と字義の検討、である。

現在確認できる青銅器から、本研究では昭王期と考えられる58器を検証し、うち52器を確定した。さらに52器の字形を検証し、昭王期文字(字形)を確定。昭王期の異体字も確定した。

研究成果の概要(英文)：This study establishes, the principal objective on the letter of “Zhao Wang” in the China Western Zhou Period, and it is a purpose to clarify a decision and a characteristic of the letter form more in the time. The concrete study content is that (1)Times examination of Chinese Western Zhou Bronzes confirmed now, (2)Decision of “Zhao Wang Age Bronzes”, (3) Inspection of a letter form of Bronzes inscriptions, (4) The confirmation of the alternative form of character and examination of the meaning of the word.

From the Bronzes which I could confirm, I inspected 58 Bronzes thought to be “Zhao Wang Age” in this study and I hit it and established 52 Bronzes now. Furthermore, I inspect the letter form of 52 Bronzes and establish “Zhao Wang Age the Letter Form”. I established the alternative form of character of “Zhao Wang Age”.

研究分野：漢字学

キーワード：金文 昭王期 青銅器 西周時代

1. 研究開始当初の背景

西周時代の区分とその発展段階については、現在の先行研究により、概ね異論は無いと考える。また、西周時代前期については、武王・成王・康王期は殷時代の文化慣習を取入れながら、西周独自の社会形成に大きく向かった時代であり、次代の昭王期においては、康王期の社会体制を引継ぎ、確固たる西周社会を成立させたと考えた。よって、昭王期は、西周時代中期以降へ継続する西周社会基盤を創造した時代と推論した。

このような史実から、古代中国社会に関する研究を行う場合、昭王期の文字や青銅器銘文に着目し、それをより詳細に解明する事は、大変重要であると推察した。

しかし、これまでの青銅器銘文論の中で、昭王期の青銅器銘文に特化し論文を発表した研究者は、唐蘭氏のみと思われた。その中では、文字解釈と銘文読解が中心で、昭王期における文字の共通性や分類については研究されていない。

また、現在、国内外の漢字(特に、字形)に関する研究は、同字体を時代別に検証し、その変遷の究明や、近年における新出土の戦国時代前後を筆写年とする肉筆文字と青銅器銘文中の字形を比較検討することで隷変の過程に着目し、その点から漢字の変遷を多くの研究者が研究をしている。このことは確かに重要である。しかし、変遷過程を究明する場合において、隷変過程の字形と西周金文形・戦国金文形の間には文字変遷の時間的隔たりがあり、検証する場合は研究者の想像力に委ねられてしまう点がある。その点で、より明確で客観的な検証は得難いのではないかと考えた。

さらに漢字変遷の研究において、昭王期の文字を扱う研究者は多いが、昭王期の時代性に特化した文字論は見られない。

このような面からも、昭王期の文字に着目する本研究課題は、現代の漢字研究の歴史において重要な位置を占めると確信した。

2. 研究の目的

本研究課題は、西周時代前期の最終王と位置付けられる昭王期の文字に焦点を当て、青銅器銘文に使用されている文字(字形・字義)と昭王期における特徴的な文字(異体字)を調査研究することで、西周時代昭王期の文字成立の過程とその特徴の究明を主たる目的とした。

更に本研究結果を基本にして、西周時代から戦国時代の文字資料を研究する場合に、漢字変遷の全体像を解明することが可能になると推察した。

また、未解読の文字(字形・字義)を詳細に検証することで、古代中国史と『周禮』の新たな解明へ展開することも研究の視野に入れ研究方法を立てた。

特に『周禮』における政治機構、祭祀に関する事項の新たな解明になると考えた。

3. 研究の方法

中華人民共和国にて国家プロジェクト「夏商周断代工程」(第九次五ヶ年計画のひとつ1996年5月16日開始)が行われ、そして夏商周断代工程段階成果学術報告会が1999年9月なされた結果、『西周青銅器分期断代研究《夏商周断代工程報告集》』(文物出版社1999年11月) <以下、『報告集』と略> が出版された。

本研究では、この『報告集』を基礎資料として、その中で結論された昭王期青銅器(『報告集』では昭王期を前995年から前977年と結論)を近年発表された青銅器に関する論文と併せて精査し、代表的な工具書の断代を比較検討しながら昭王期の青銅器をより明確にした。

本研究年数は3年間を想定し、(1)昭王期金文の調査、(2)昭王期における異体字の研究、(3)昭王期文字と前代までの文字の比較、を中心に研究を進めた。(初年度において、日中関係の悪化により渡航できず、故に一年延長。)

(1) 昭王期金文の調査

この項目は本研究の中核を成し、しかもここでの断代が全ての基準になるため、より慎重に調査を進めた。

研究当初(2012年4月時点)は、銘文読解・比較検証を行うための基礎資料として、『西周青銅器銘文分代史徴』『商周青銅器銘文選』『西周青銅器断代研究』『商周金文模範総集』『近出殷周金文集録二編』『殷周金文集成』を中心として取扱い、その調査後に器物の実地調査を行う予定であったが、日中関係の悪化により、計画変更を余儀なくされた。

しかし、2012年9月に、中国青銅器の全器物が確認可能な『商周青銅器銘文暨圖像集成』が上海古籍出版社より出版されたため、急遽、研究内容を変更し、新たに、『報告書』(『西周青銅器断代研究』)を基礎資料として、『商周青銅器銘文暨圖像集成』、『殷周金文集成(修訂増補本)』、『商周金文編～宝鶏出土青銅器銘文集成～』、『商周青銅器銘文選』、『西周青銅器銘文分代史徴』の6種の書籍比較に依って、昭王期断代の青銅器を確認した。

また、『商周青銅器銘文暨圖像集成』掲載の全青銅器について、その断代を確認した。結果として、～の書籍において昭王期と断代された青銅器比較表を作成した。

比較検討については、『報告書』の研究結果を基準とし、他の書籍との断代の同、不同を確認。断代不同の青銅器については、現在までに発表されている、それぞれの青銅器についての研究等も精査し、再度、断代を検討した。

調査検討に際しては、銘文内容・器形・紋飾を中心とし、字形に関しては参考程度とした。(器形・紋飾の変遷と、字形の変遷には

ズレを生じることが確認)

(2) 昭王期における異体字の研究

～ の書籍の中で、昭王期と結論されている青銅器を調べると、断代の不一致が見られるものがあった。

まず、昭王期断代で一致する青銅器の銘文内容を検証し、そこに記載されている各文字について確認を行った。

次に、断代が不一致の青銅器について、その銘文内容の検証、器形・紋様の検証を行い、昭王期と断代できる青銅器を確定した。

上記、全ての確認を行い、異体字を銘文中から抽出した。

(3) 昭王期文字と前代までの文字の比較

前述の(1)(2)の研究から、昭王期文字の一覧表を作成した。

これにより、昭王期の字形の特徴が看取でき、比較検討が可能になった。

4. 研究成果

(1) 昭王期金文(青銅器)の確定

前述の～の書籍で、昭王期と結論付けされた青銅器を全て列挙すると58器が確認できた。

この58器について、さらに昭王期青銅器の書籍別断代比較を行った。その結果、『報告書』と同じ昭王期または昭王期前後(時代が極めて近い)と考えられる青銅器25器を確定した。

さらに、残り33器の中で、『報告書』と断代が一致しないもの(例えば、同じ青銅器であっても、ある書籍では昭王期だが、ある書籍では康王期)が、16器あることも確認した。

確認に際しては、各書籍の論拠を明白にしながら進めた。

(2) 断代不同16器の青銅器検証

この各16器に関して、断代に相違が生じた原因とその所在について考察し、それぞれの断代結果について再検討を行った。

この検証により、9器(内、3器に関しては、検証資料不足のため結論を留保)に関しては、昭王期または昭王期に近い時代とは判断できない、と結論付けた。

(3) 史書と金文における昭王に関する事項

昭王期断代をより明白にするため、史書(『史記』『春秋左氏傳』『呂氏春秋』『竹書紀年』『楚辭』)と青銅器銘文の内容の再確認・検証を行った。

史書において、昭王の事項が見られるのは征行(軍行)に関することだけであり、58器中13器に、史書と関連する事項が確認できた。

昭王期の次期である、穆王期銘文でも征行は見られるため、穆王期の青銅器銘文につい

てもより詳細に検討した結果、13器に関しては昭王期と結論した。

(4) 昭王期における儀礼

昭王期と比定される58器中で、儀礼の内容が確認できる25器の銘文について検証した。検証方法は、佐藤信弥氏の検証を基に、「儀礼場所」、「祭祀儀礼」、「賜与者」、「賜与品」、「器制作者の身分または祖考」の順に考察した。

これにより以下の祭祀場所、「(莽+方)京」、「宗周」、「成周」、「(广+干)」、「周廟」、「宮」、「特定の場所」で、祭祀の異なることが確認でき、その特殊性も考証した。

「(莽+方)京」においては、周王の祖先祀所が置かれた祭祀的都市である。また辟雍といわれる祭祀を行う特別施設があり、「(宛+食)」という周室に関連した祭祀が執行されている。

「宗周」は、王の居城が置かれた政治的都市であり、「大龠」という祭祀がなされた。

「成周」も「宗周」同様、政治的意味合いのある「殷」「告」という祭祀が行われている。

「周廟」では、作冊命に類似した儀礼が行われていることが理解できた。

「(广+干)」に関しては、「周廟」と同様の機能があると考察する。「(广+干)」は、昭王南征時の重要地であるため、周国に戻らずに、その場で臨時的に祭祀が行われた可能性が推測できる。

「宮」と呼ばれる場所では「告」「殷」「用牲」のように、前述の成周における儀礼が施行されている点で、宮は一時的な成周としての機能を持ち合わせていた可能性も考慮できる。

また、「特定の場所」においては様々な儀礼の実施が確認でき、祭祀の多様性が見られる。この中には、辟雍施設の一部であるものも見られるため、今後、辟雍施設に関して詳細な検証を行い、「(莽+方)京」の役割と並行して明確にする必要があるだろう。

これらの結果より、「(2)断代不同16器の青銅器検証」で昭王期と判断できなかった、(言+妾)簋、折尊、折方彝に関しては、この儀礼に関する考察により、昭王期と結論付けた。

(5) 青銅器の型式、窃曲紋、鳥紋、獸面紋に拠る再検討

再度、昭王期と結果報告されている58器に関して、青銅器の型式・紋様による再検討を試み、型式・紋様に関する比較表を作成した。

この比較表により、前述の断代不同の16器中、断代がいまだ特定できない10器についても再検証した。

本研究によって、最終的に58器中52器を昭王期または昭王期に近い断代と結論し、

この結論をもって昭王期の文字も確定できたことが、本研究の最大の成果であろう。

しかし、ここまでの研究を進めるために、本研究期間は短すぎたと感じる。現在まで確認できる膨大な数の青銅器の精査は、一筋縄では進まない。さらにここ数年においては、中国における考古学の目覚ましい発展により、古代遺跡が次々と発掘研究されており、新たな遺跡に関する調査研究も並行して実施しなければならず、一個人による研究には限界があるだろう。

本研究を総合的に進めるのであれば、専門的組織の編成は不可欠である。今後の研究方針を考えたい。

昭王期の文字を確定したことで、その特徴については、さらに研究中である。字例の多い「彝」「寶」「尊」については、その特徴が顕著にみられ、時代判定に益するものと考えられる。

また並行して、異体字に関する研究も、現在進行中である。異体字については、7種の文字が確認できた。

早期に、これらの課題について究明し、結論をまとめたい。

5．主な発表論文等

〔学会発表〕(計 1 件)

書学書道史学会(花園大学、2014、9、14)

『中国西周時代昭王期の青銅器考』

発表者：古木 誠彦

6．研究組織

(1)研究代表者

古木 誠彦 (KOKI Masahiko)

九州女子大学人間科学部 准教授

研究者番号：9 0 3 4 1 2 9 7